

沖見初炭鉱（1）

この炭鉱は山口県宇部市の東部にあつて、主として海底採掘である。

創立着手は大正四、五年頃であつて、地元の宅野潔、藤井保その他数氏が鉱区を提供し、鈴木商店が開発費を現金出資する形をとつた。初めの資本金は壹百万円で、次で増資を行い貳百万円とする。

鉱区は海面下の二百五十万坪位で、当地の有名な五段（イツダン）層を採掘する方針であつた。社長 西岡貞太郎、専務 石田亀一、常務 萩野休次郎、藤井保、宅野潔の諸氏であつた。

陸上から海底に向つて主要坑道を掘り進み、適当なる深度に於いて五段炭層を採掘する見込みだつたが、主要坑道が蛇紋岩の厚層（断層）に行きあたつたので、これを貫通するのに二ヶ年位を要したため、大正七、八年の石炭好況にめぐりあい乍ら、石炭が出炭できなかった。然し、世の中は戦時ブームの為に（沖見初炭鉱の）百円払込株が時価二百五十円も唱えておつた。

種々苦心の結果そろそろ石炭が出る事になつたが、市場値段は戦後の反動下落で非常に安値となつた。（断層突破等の）海底採炭の困難もあつて常に収支が合わず、毎月毎月五万円から十万円の喰込みが続いた。

右の結果、借入金がどんどん増加して、資本金は二百五十万円で借入金は五百万円にも達するようになった。前途の見込みも暗たんたるものだつた。西岡貞太郎社長も神戸本店に対し何とも面目が立たず、どうしてよいか方針をたてるのに苦心せられた。

石田氏や萩野氏の現物出資はもうそろそろ儲かる、来月はよくなる、来年はよくなると云つて一寸延ばしの模様である。西岡氏は毎日気が気でなく、遂に大方針を決めざるを得ないことになつたので、当時下関・帝炭（帝国炭業）本社の販売課長をしておつた私（金子三次郎）に、宇部に行つて沖見初の将来を判断して事業を中止するか継続するか、兎に角行つてくれ、君の判断によつて今後の方針を決める。又、現在の役員は社長始め全員総辞職をするから迷惑でも鈴木のことを思つて宇部へ行つてくれ。その為には君が新しく専務取締役となつてくれれば、現在の役員は総辞職をすることにして適当な人事配置は私に任せる、と涙を流さんばかりの御話だったので、私も非常にお世話になつた西岡さんの御なげきを思つて遂に現地へ行くことを決心した。

この時私は三十三才だつた。大正十四年の初夏のことと思ふ。（昭和 40.7.20 記）

沖見初炭鉱（2）

沖見初着任後、前重役の社長 西岡貞太郎氏、石田亀一氏、藤井保氏などは引退せられ、社長に（二代目）鈴木岩治郎氏を迎え、現地重役は所長に萩野休次郎氏、常務に宅野潔、（現地重役）専務に金子三次郎といふ陳客（原文ママ）で再出発することになった。

小生の家族を下関に置いたまま、単身鉱営所の独身寮に起居して鉱山の建て直しに努力することになった。当時は坑内の状況が非常に悪い上に石炭の市況も大戦後の不況を受けて、炭価は低落するのみだった。

掘進本坑道の正面に西隣の東見初炭鉱^{ひがしみぞめ}の鉱区が意地悪く出っ張っておって、これを突破することが出来ない。こんな事は事業着手以前から当然判かりきった事実であった筈だが、当時の重役はこの突出部に行き当たる迄に相当の石炭が採掘出来るから出張問題^{でっばり}はその後に解決が出来ると考えたか、又は出っ張りの処は炭層を避けてその部分を掘って進み、鉱区を通過して又石炭につけるか、どちらかに依って打開しようと考へたらしいが、どうもそうゆうふうには行かなかつたらしい。

私の着任した時は、当鉱区に出ておる東見初の鉱区を買収するか、又は鉱区通過を認めさず以外には方法が無いようであった。

小生は隣鉱区の東見初頭取・藤本閑作氏に対し右鉱区の売渡しを頼み込んだが、藤本氏は有名なエゴイストであった。多額納税議員で貴族院に籍を置いておって資産も相当に持っておる長者であったが、利害の問題に対しては非常に六可敷い人だった。

東見初では鉱区は金ではゆづらぬと云ふので、然らば交換してくれと申込んだが、交換なら東見初 20 万坪に対し 100 万坪を提供せよと云って来た。その他色々六可敷く無理を云ふので、いっそ合併したらどうかと伝へた。

毎月毎月喰込みが重なるし資金は出にくくなる一方だから閉山することも考えたが、閉山は大変なことだから多少不利であっても東見初と共同経営にしようかと考へたので、東見初と合併のことを藤本氏に提案した。その条件は沖見初としては非常な譲歩であるが、閉山よりはましかと考へて下記の条件を出した。

- ・東見初を 750 万円と評価し、沖見初を 250 万円と評価する。
- ・相方（原文ママ。正しくは“双方”か）とも金銭は出資せず、現物出資とする。

以上の如きものだったが、藤本氏は沖見初は 250 万円の値打がないと云って承知しない。こんなことで廿^{にじゅう}回も会見して貰^{もら}ったり、あらゆる手を打ったがだめだった。

ところが、沖見初と東見初の合併の風評が地方新聞に記載された。この記事を見た九州の久恒^{ひさつね}鉱業の社長が、自分が沖見初を買いたいと台銀（台湾銀行）に申し込んだ。

然し、私は東見初との合併だから将来の貴重性を考へて 250 万円と評価したが、単独で東見初以外のものに売却するならば、当社には借金もあることだから 600 万円を切ることは出来ぬとことわった。

それで久恒は引下がったが、この話が機縁になって大倉喜八郎がやっておる大倉鉱業に聞えたので、大倉が（沖見初炭鉱を）買いたくなり、大倉から台銀に 250 万円で買いたいから鉱山を見せてくれと云って来た。当時、大倉喜八郎は台銀の役員をしておった。

（昭和 40.9.7 記）

沖見初炭鉱（3）

大倉から担当重役と主任技術者が来鉱して数日かかりで当炭鉱の調査をやった。

当時は、神戸の鈴木商店は整理休業しておったけれども、沖見初は自活の為に独立採算制を強行採用して石炭を採掘しては大阪^{そのほか}其他^{ほか}へ出荷し、現金の収入を^{はか}り、好都合に辻つまを合わせるのみならず、半期に約拾万円位の^{よじよう}餘剰利益をあげておった。

そんな状態だったから一寸^{ちよつと}視察に来た大倉の途中には、若し大倉が充分な投資をやれば更に成績は向上すると見込^{みこ}みおったのも無理なかった。大倉と台銀との交渉が成立して炭鉱は大倉が 250 万円で買収することになって台銀は右代金を受取って、鈴木関係の貸出金を（約 500 万円位）打ち切ることになった。

右の次第で、当社の前役員及び社員の幹部^{どくろ}處は皆辞職することになった。

当時、私は住居を大阪の十二軒町に借りておったので、事務引継が終了すると共に大阪で浪人暮らしとなった。十三才で家を出て奉公務めをして約三十数年、初めて文字通りの浪人生活することになった。

神戸の鈴木商店は無論解散したままで、まだ復興は出来ないままだった。私が沖見初の重役をやめたのは鈴木閉店後約一年以後位だったから、昭和三年の夏ごろと思う。

沖見初の大阪販売店で働いておった小樋井^{こひい}君、吉住金造、青柳義弘君はとりあえず大倉組の大阪石炭部に働いておったが、この三君も程なく大倉をやめて自活することになった。

大倉組では鈴木から引受けたあと、資金を三百万円位つぎ込んで約二ヶ年位操業したが、どうもうまく石炭が出炭せぬので、毎月欠損が出るので閉口してとうとう閉山をして炭鉱は休止し、重役も技師長も責任をとわれて大倉組を退社したまことに哀れな最後だった。

（昭和 40.10.20 記）

宇部のいろいろ

沖見初炭鉱の経営をまかされる迄は、私も宇部については何の知識もなかった。
今日の宇部地方は工業地として宇部興産を中心としてまさに盛大なもので、将来も益々発展するものと思われる。

発展の要素は豊富な石炭を埋蔵しておること、企業力の旺盛な地元有力者があったことなどが大きな要素になっておる。

発展の根本は渡辺^{すけきく}祐策氏（*）の如き人格者が沖の山炭鉱（原文ママ。正しくは“沖ノ山炭鉱”）の開発に努力せられて、欧州大戦、第二次大戦などを経て非常に発展した。渡辺翁の徳をたたへるために渡辺館（渡辺翁記念会館）が立派に建設せられておるし。

（*）元治元年(1864 年)、萩藩家老福原氏家臣、渡辺恭輔の二男として現在の宇部市に出生。明治 30(1897)年に開坑した沖ノ山炭鉱で成功。以後、炭鉱より得られる利潤をもとに宇部電気、宇部軽便鉄道、宇部銀行、宇部新川鉄工所、宇部セメント、宇部窒素工業など多数の企業を設立。昭和 17(1942 年)、炭鉱、鉄工所、セメント、窒素の 4 社合併により宇部興産（現・UBE）を設立し、宇部を一大工業都市に育て上げた。衆議院議員にも当選、立憲政友会山口県支部長を長年務め、宇部鉱業組合初代会長、宇部商工会議所初代会頭などを歴任。

宇部興産の本社事務所玄関には渡辺翁の七分身の立派な銅像がたっており。私が宇部に着任したころは私の三十三才の時だったが、その未熟な若造が鉱区の話や合併の話など色々相談に上った時に、懇切に指導して下さった。

私は、^{その}其後今日まで色々な人物に面会していろいろ会談も交したが、渡辺翁の如く公平無私な意見と全体的利害を越えて自分本位の意見を述べず、他人にも自分の息子の如く指導してくれる人物に会ったことがない。

珍しく稀有な人物であった。宇部の今日の発展は全く翁の人徳があったからと思ふ。
こんなに高潔な誠意ある努力家は当社の金子直吉翁のほかに渡辺祐策翁ぐらいかと思ふ。

次の社長・^{たわらだあきら}俵田明、三代目の中安氏（^{なかやすかんいち}中安閑一）など、皆翁の遺風があった。俵田氏には其後九州の硫化鉄鉱の鉱区試掘事件で大変便宜を得たし、中安氏には終戦後、戦時物資の銅製品約 300 万円の払出支援を承諾せられたのでこれを東京日商へ引渡しを完了し、小生も当時十万円程の謝礼を受けた。これも渡辺氏の遺風があったからだと思ふ。
今日の興産（宇部興産）は、はたしてどうか。

私は以上の通り、宇部在任の三、四年間に非常に勉強が出来た。

（昭和 40.10.22 記）

宇部のいろいろ

宇部炭田の炭質は九州地方のものに比較すると非常に若い炭質で、粘りが無くて俗に業者が云ふ「サエモノ」に属する。

従^{したがって}而、カロリーは九州に比して少々低い。まづ、五^{いつだん}段炭で 5,500 カロリー位である。その下層から出る大^{おおは}脈炭はさらにカロリーが低く 4,500 カロリー位である。灰^{かいぶん}分は五段炭が 15%位で、大脈炭は 25%以上もある。

石炭が若いから燃焼の時着火がたやすく燃えやすい。そして黒^{けむり}い煙が出ずい白い煙が出るので、都市でストーブや料理用、台所用などに歓迎せられる。それで、東京都や大阪市など都会用として大部分が売れる。

大^{おおは}脈炭は灰分は多いけれど、じわじわ燃えるので昔から塩田用として独自の市場性があり、瀬戸内海の沿岸各地の塩田で常用せられて来た。

初期には陸地採炭だったが、陸地が掘りつくされると海底にも炭層があることが知られて、最近では主として海底採掘が主となった。

初期の陸地採炭の当時は石炭の存布が田畑の下部であって、しかも地表から浅かった（五十尺～百尺位）ので田地の表面に豎^{たてこう}坑を井戸の如くうがって着炭をすると、その坑を中心として東西南北に水平坑道を炭層に添って進めて行き、五十間位進んだところで又地表に井戸を掘った。

石炭は井戸の上に「ヤグラ」を組んで大きな“ざる”を釣り上げたり下げたりして石炭を汲み上げた。この“ざる”を上下する為に「ナンバン」といふロクロを組んで、これを女^{にんご}人夫が棒を通して数人で押して廻った。田地の所々に豎坑を打ったので、あたかも「レンコン」の如く穴があくので、これをレンコン堀と称しておった。

陸上の石炭層は傾斜が無くてほとんど水平に近いものが多かった。海底の部分も矢張りゆるく、平均三度位であった。海底から炭層迄も浅い所が多く、100 尺～500 尺位だった。

（昭和 40.11.29 記）